

日立製作所のジェンダー・フリー& ファミリー・フレンドリー・プランと ダイバーシティを生かした／に生かす研究開発

波多野睦子

日立製作所では、「個を尊重して多彩な人財の能力や発想を生かし、だれもが活躍できる会社を目指す」という観点から、ジェンダー・フリー&ファミリー・フレンドリー・プラン（F.F.プラン）として具体的な施策に取り組んでいる（<http://www.hitachi.co.jp/csr/society/member/diversify/index.html>）。図1にダイバーシティ推進に対するロードマップを示す。他社に先駆けて2000年から開始した女性活躍支援「F.F.プラン」により、女性の採用数拡大や育児・介護などの制度の充実が進んだ。2006年からダイバーシティ推進PJを設置し、意識改革を中心とした「F.F.プランII」としてダイバーシティ化を加速している。多様な人財を受け入れる風土への改革を「人財」に関するダイバーシティ、そうした多様な人財のアウトプットの最大化が図れる多様な働き方の実現を「働き方」に関するダイバーシティと、二つの切り口から具体的な施策を検討・実施している。研究所はダイバーシティやF.F.プランの観点でも先導する役割がある。女性研究者のキャリアアップの目安の一つになる博

士号取得に関しては、女性社員の新規取得者数と女性比率は年々増加している。また入社後取得比率と取得時の勤続年数に男女の差がない。

ダイバーシティを生かした／に生かす研究開発

企業の研究者は5年、10年先の社会状況とビジネスを予測し、それに必要な新技術を先行的に研究開発する必要があるが、最近この予測が困難になってきている。特にモノカルチャーな組織では、どうしても計画の不十分性などに目が行き、それを指摘する評論家になった議論が先行し、混とんとした中から方向性を見いだすのは難しい。変化が激しく多様化するニーズにこたえるには、ダイバーシティ化が研究の段階から必要であり、女性の寄与も大きいであろう。筆者のチームはモバイルディスプレイの研究テーマで集まった、性別、年齢、出身、専門がごちゃ混ぜのダイバーシティな人財からなり、コラボレーション型組織を目指している。このチームなら、ディ

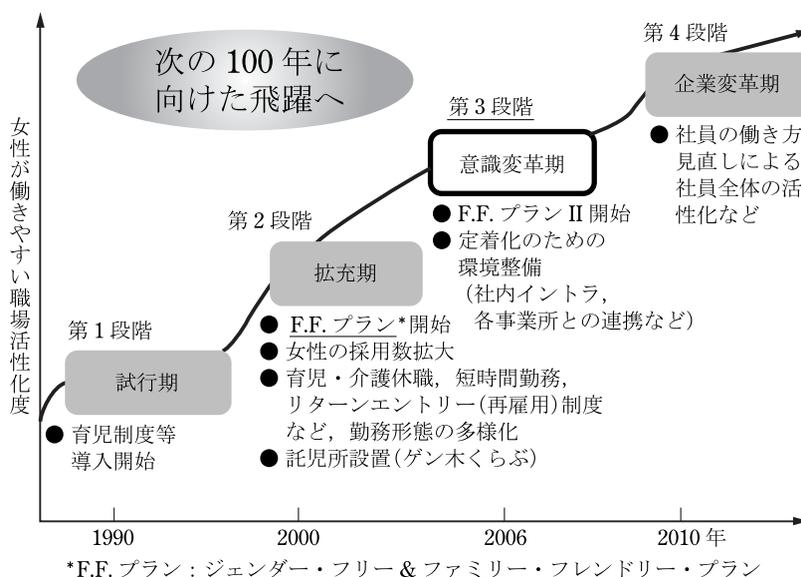


図1 日立製作所のダイバーシティ推進全体ロードマップ

波多野睦子 (株)日立製作所中央研究所
E-mail mutsuko.hatano.tx@hitachi.com
Mutsuko HATANO, Nonmember (Central Research Laboratory, Hitachi Ltd.,
Kokubunji-shi, 185-8601 Japan).
電子情報通信学会誌 Vol.90 No.10 pp.923-924 2007年10月



ライフ顕微鏡のリスト型センサノード

図2 筆者のライフ顕微鏡⁽¹⁾によるワークライフバランスの試み

スプレイ産業を変化させる先鋭的で創造的な技術を開発し、新しいビジネスを開拓できると信じている。

最近の筆者の取組みを、私生活を露呈することになるが御紹介する。日立では、超小型、超低電力コンピュータ技術を用い、腕時計型のセンサノードを開発している。これを用いると加速度、温度などの信号を24時間サーバに蓄積することができる。この信号処理により、毎日の生活行動を記録、体重や心身の状態など「行動」の結果得られる影響との関係を解析して、従来客観的に評価することのできなかった自分の行動を省みる。中央研究所ではこのシステムを「ライフ顕微鏡⁽¹⁾」として、多様な応用を計画している。筆者はこの6月から被験者の一人となって常時装着し(図2)、時間の可視化によりワークライフバランスに生かそうとしている。“忙しいのだから手伝ってよ、全く何にもしないんだから…”と家族にヒステリックになったり、“うだうだいいっていないで、すばっと決断しなさいよ”と部下をせかしたりすることがある。研究者は現状を定量的に示して解決案を提示しないと、と反省した。図3は2か月のライフ顕微鏡の加速度の周波数成分を色分けで可視化した筆者の「ライフタペストリ」である。以前は夜遅くまで土日も会社で、とワークライフアンバランスであったが、実験開始後5時間睡眠を心掛けるようになった。また運動量が少ないことが判明し、最近はやりのピリズブートキャンプにトライすることにした。それも20分間の赤いタペストリとして記録されている。更に興味深いことに女性と男性被験者データを比較すると、朝と休日の忙しさが違いが明確である。特に朝の目覚めから活動までの立ち上がりの速さ、活動量、活動時間が異なる。男性のデータを見ると、早朝ランニングをしている人を除いてゆったりと過ごしている。一方筆者は、図3の矢印の1.5~2時間の赤いタペストリ(通勤時間は10分なので無視でき

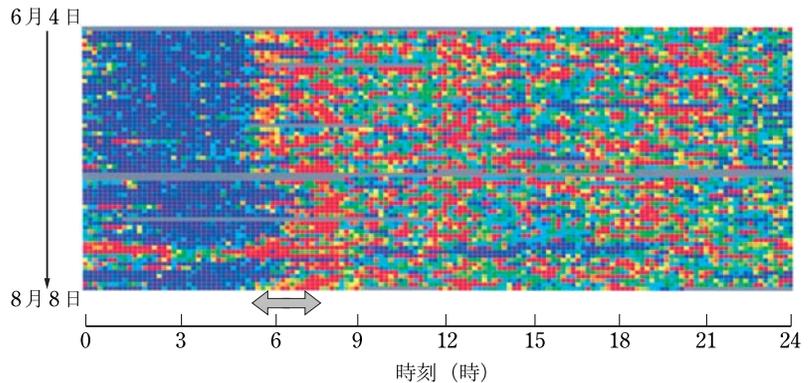


図3 ライフ顕微鏡の加速度の周波数成分を色分けで可視化した筆者の「ライフタペストリ」 青色から水色：睡眠、会議など、水色～緑：デスクワークなど、黄緑～赤色が軽作業以上の活発な動き。

る)は、朝・夕食、娘のお弁当作り、洗濯、と家事に費やされている。徹夜の仕事があっても、二日酔いでも、この時間は省くことができない。まだ夢うつ状態で本日の献立と家事の手順を決め、目覚めると同時に行動。このライフタペストリを家族に示すことで、4時に起きているもののPCに向かっている夫はごみ捨てや朝食の用意、娘は洗濯機を回すこととお弁当の卵焼きを作る、という協力を得ることができた。一方仕事に関しては、受動的な会議やメールは活動量が小さいことが判明。意外に多くの時間を、それも一番頭が働く時間帯を費やしていることが分かった。これは受動的な仕事として優先順位を下げた。また予測はしていたものの、週に数日の工場への往復がいかにか筆者の時間を占有しているのかが明らかになった。Face to Faceの会議も重要だが、TV、電話会議が可能なものはできるだけ切り換え、効率アップを図っている。

ライフ顕微鏡は筆者にとってはワークライフバランスを支援する技術であり、まるでワークライフ望遠鏡のよう。望遠鏡と呼びたいのは、今は忙しい朝もいずれは自分のために使える、高齢化する両親の面倒は可能か、この仕事は若い人に譲ってチャレンジさせてみよう、というように未来の時間を希望的に予測することができるからである。欲張りおばさんかもしれないが、何歳になっても遠い未来に夢を持ち、ポジティブに過ごしていきたい。

文 献

- (1) 矢野和男, “センサはWebを超える,” 情報処理, vol.48, no.2, pp.160-170, Feb. 2007.

(平成19年8月3日受付 平成19年8月10日最終受付)

はたの むつこ
波多野 睦子

1983 慶大・工学。同年(株)日立製作所入社。以来、中央研究所にて超伝導デバイスや量子効果デバイスなどの研究を経た後、モバイルディスプレイの研究開発に従事。1997~2000カリフォルニア大バークリー校(UCB)客員研究員。現在、室長兼主管研究員。工博、日本学術会議連携会員、応用物理学会、物理学会、Society for Information Displays 各会員。